「ツーリズムを通して平和を」のスローガンによせて
―― ダークツーリズムはその進展にどのように役立つものか ――

大橋　昭一

I. はじめに

「ツーリズムを通して平和を」（Peace through tourism）というスローガンは，世界のツーリズム関係者において，よく知られている。スローガンの主旨は自明であり，コメントを必要とするものでは全くないが，とりわけ今日では，例えば2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻戦争のことなどを考えると，改めて注目されるべきものである。

では，戦争による惨禍などの跡を保存し，広く提示している，いわゆるダークツーリズムサイト（ただしここでは主として旧ナチス強制収容所（Konzentrationslager：KZ）を含む戦死者・戦争犠牲者・部族間抗争犠牲者の追悼施設等をいう）を訪れることには，どのような意義があるものか。すなわちこうしたツーリズムは，「ツーリズムを通して平和を」というスローガンにとってどのような効果があるものか。この問題を近年において取り上げているものに，例えばイギリス，カーディフ大学，ダンクレー（Ria Dunkley）の2017年の論考（Dunkley, 2017）がある。

ただし，このダンクレー論考は，ロシアのウクライナ侵攻戦争勃発以前に公表のものであり，そのタイトルは「ダークな場所における1つの光か―ダークツーリズム経験の日常生活に与えるインパクトの分析―」（Dunkley, 2017）というものであって，かつ，まえがき的にその内容を一言のもとに示すと，次のようなものであることが充分に斟酌されておかなくてはならない。

すなわちダンクレーによると，ダークツーリズムサイトなどを訪れるダークツーリズムのツーリストたちは，それによって直ちに「ツーリズムを通して平和を」の精神をもち，例えば戦争反対というスローガンのもとに運動を行ったりする者であるのかといえば，現状のままでは，必ずしもそうとは言えない。というのは，ダークツーリズムは，現状においては，他方では，同サイトの展示物があくまでも“過去のものであって，現在は平和な時代である”という意識をいだかせるものになっているからである，というのである。

ただしこれは，ダンクレーによると，必ず次の条件が付くものである。「しかしながら，現状ではこのようなダークツーリズムサイトが，例えば取り組み方を変えて，単なる共感性（empathy）や自然発生的な同感性（nurture compassion）を超えるような，真の同感性，すなわちコンパッション（compassion）を生み出すものとなり，人々に対し平和のために有用な動きや行動を起こすきっかけになるようなものになるならば，それは必ず『ツーリズムを通して平和を』に向かって，大きな貢献をなすものになるであろう」（Dunkley, 2017, p. 108）というものである。

本稿は，主として，以上のようなダンクレーの所説，ならびに，イギリス，セントラル・ランカシア大学のシャープレー（Richard Sharpley）／フリードリヒ（Mona Friedrich）の所説（Sharpley & Friedrich, 2017），および，デンマーク，オーフス大学のクヌードセン（Britta Timm Knudsen）の所論（Knudsen, 2017）などを取り上げ，「ツーリズムを通して平和を」というスローガンを念頭におきつつ，直接的には，ダークツーリズムなどがこのことにどのように貢献するものであるかについて考察し，大方の参考に供するものである。なお，ダークツーリズムそのものに関する理論的実践的問題などについては，すでに拙別稿（大橋, 2022）で論じている。本稿はいわばその続編にあたるものである。併せてご覧いただくよう希望する。まず，ダンクレーの所論を取り上げる。

Ⅱ. ダンクレーの問題提起

ダンクレーの上記のような問題提起は，本稿筆者のみるところ，要するに，今日の社会ではダークツーリズムにも矛盾した２側面があることを指摘したものであるが，これは，端的には，今日の社会が（すべてのものの商品化を進める）資本主義社会であることに起因する。ダークツーリズムも，こうした商品化的資本主義社会における事物の法則的な矛盾的存在性をまぬがれることができないことを示したものである。

この点は極めて重要な論点であるので，ここでは，まず，ダンクレーの問題意識がどのような観点にたつものであるかについて，彼女の論述に沿って，改めてやや詳しくレビューする（以下本節は Dunkley, 2017, p. 108ff. による）。

ダンクレーは上記論考の冒頭において，「近年，ツーリズム研究では，（通常的な単なる快楽志向的なツーリズム発展に志向しただけの旧来支配的なツーリズム研究に対し）批判的な方法論的立場にたつ試みが提起されてきた。それは例えば，いわゆる“ホープフル・ツーリズム”（hopeful tourism）などのオルタナティブ・パラダイム（an alternative paradigm）の提起にみられる」（“ホープフル・ツーリズム”について詳しくは大橋, 2012 を見られたい。なお引用文中のカッコ内は本稿筆者のもの，以下同様）とし，そうしたオルタナティブ・パラダイムとして，さらにダークツーリズムもあると位置づけている。

ここでは，ダークツーリズムが，少なくとも一般的には，ホープフル・ツーリズムなどと同質的なものとして措定されていることが注目される。ちなみにその論拠は，次のところにあるとされている。

すなわち，ダークツーリズムの考え方には，本来，社会的な使命（a social mission）がある。というのは，ダークツーリズムサイトが（通常的ツーリズムサイトにはない）非調和的なヘリテイジ（dissonant heritage）であることによって，そこを訪れるツーリストたちに対し（再教育を含む）教育（reeducating）的効果をもたらすものであることが期待されるが故に，それによって「ツーリズムを通して平和を」を促進するものとなりうるからである。

ただしその場合，ダンクレーによると，「こうした（教育的な）働きが，どのような程度と範囲

のものであるかは，訪問者たちが訪問をきっかけにその後の日常生活において，いかに（戦争などに対する）批判的な行為をするかの程度によって決まる」。では，それは果たしてどの程度のものか。

この点について，ダンクレーは，次のように，すなわち「そうしたことが，ダークツーリズムサイト訪問というような束の間的な要因（ephemeral moment of transformation）によって生まれる程度は，どの程度のものかといえば，それはあくまでも，“ある程度”（to some extent）のものでしかない」（Dunkley, 2017, p. 108）と規定している。つまり強い限界があるものである，というのである。

しかしこの場合，もしもダークツーリズムサイト訪問によってそうした（日常生活における）態度や行動に変化があった場合，そうしたこと，すなわち，ダークツーリズムにそのような効果があったことは，どのようにして判かるものか。それは，ダンクレーによると，ダークツーリズムサイトを訪問した人に，例えばインタビューして，当該訪問によって生まれたであろう（単なる印象とは異なる真の）意識や意欲を，当該ツーリストの心の深部にまで達する形で聞き取り，分析すること（in-depth analysis）によって初めて可能になる（Dunkley, 2017, p. 108）。それ故，この問題では，こうしたことがさしあたりまず，なされるべき課題になるというのである。

このことは理論的には，さしあたりまず，（単なる）“共感性”（端的には“印象”）と“同感性”（単なる“印象”とは異なる“意志・意欲”：本稿筆者としては例えば“連帯性”というべきもの）とは異なることを前提にするが，では，両者はどのように異なるものか。この点についてダンクレーは，次のように論述している。

すなわち「ダークツーリズムサイト訪問は，確かに共感性を生むものではある。しかし同感性という意識までも生むものであるかどうかは，別問題である。ところがこれは，オープンに論議することを避けなければならない問題である。というのは，“同感性という意識”は，“単なる共感性”とは異なって，行動を起こすための起動力となるような感動的反応（emotional response）をいうものであり，行動を起こすにあたり本質的な（essential）引き金になるものであるからである」（Dunkley, 2017, p. 108）。

この場合，なんらかの行動をすることは，当該本人の外部に対する公然たる行為として現われるものであり，外部に対するなんらかの意思表示として現われるものであるから，そうしたことは，通常の多くの人々の場合，（事前に）広く口外するようなことは慎重にせねばならないことである，というのである。

しかし，このことを（例えば学問的調査のために）知ろうとする場合には，順序として，さしあたりまず，ダークツーリズムにより当該ツーリストの心の中でどのような心理的作用が起きているかを知ることが必要であるが，それはどのようにしてできるものか。それは，ダンクレーによると，既述のように，当該ツーリストについて心の深部にわたる聞き取りによって可能である。つまり知ることができるというのである。それ故これが，この事柄についてのダンクレー説の事実上の出発点になる。そこでこの点について，次にやや詳しく考察する。

Ⅲ. ダークツーリズムの果たす役割について

以上のようにダークツーリズムは，要するに本来は，「ツーリズムを通して平和を」というスローガンのために，少なくとも条件つきで有用であるはずのものである。しかしその有用性のいかんは，当該ツーリストについて，心の深部にわたる聞き取りをすることによってのみ知ることができる。では，それはどのようにして可能なものか。この点についてダンクレーは，それは，単なる聞き取りではなく，当該ツーリストとの“創造的な話し合い的な会話”（creative conversation）によって可能になるという。

すなわちそれは，当該ツーリストの人間的な意識・意欲そのものを知ることをいうものであり，当該ツーリストのいわば実存主義的性格（existential nature）を知るものである。ところがそれは容易なことではない。というのは，ダンクレーによると，今日の社会では，ダークツーリズムで受けた印象の中でも，なかんずくそれに基づく，なんらかの行動のための意識・意欲といったものは，これを必ずしも広く口外して歩くようなものではない場合が多いからである。

すなわち現在の社会では，こうしたことは口外して歩くことを躊躇させる風潮がある。もっとも，こうした躊躇させる風潮が公然たる形で当人の行動に影響を与えることは，確かにそれほど多いことではない（rarer）。しかしこうしたことが，現在の世の中では存在することは，これを否定できないのではないか，というのである（Dunkley, 2017, p. 108）。

そこで本稿筆者として，こうした状況があるものかどうかを例証するため，これまでの歴史をみてみると，例えば近年でも次のようなことがあった。それは，イギリス本土領内，フランスに近いイギリス海峡にあるチャンネル諸島においてあったことである。

すなわち同諸島は，別拙稿（大橋, 2022）で詳述しているように，第二次世界大戦中にドイツ軍に占領され，島民ではドイツ側に逮捕される者もあったりするとともに，他方では島民による非戦闘的なレジスタント的行為もあり，かなりの犠牲を強いられたものであった。

ところが同諸島では，この占領期の犠牲のことについて話題とし，ナチス・ドイツ軍のしたことを弾劾・追及するようなことやレジスタント的行為を声高に吹聴するようなことは，当時のイギリス政府の意向，端的にはチャーチル・パラダイム（Churchillian Paradigm）に基づく要請もあって，公式的には戦後1990年代まで行われなかった（チャーチル・パラダイムおよびチャンネル諸島の状況についてはCarr, 2017, p. 99ff. による）。

ちなみにチャーチル・パラダイムは，第二次世界大戦終了時のイギリス政府宰相であったチャーチルが，「イギリスは勝利した国（victors）であって，犠牲となった国（victims）ではない」ことを強く主張したもので，敵（ドイツ）に勝利したことを高唱するだけではなく，（戦勝国イギリス人として）戦争中あるいは戦後のあらゆる犠牲・困難にも打ち勝った国でもあることを強調するものであった。

本稿筆者のみるところ，チャーチル・パラダイムの趣旨そのものは確かに偉大なものであっ

た。しかし反面，このためにイギリスでは，このパラダイムが強い影響力をもっていた時期には，戦争中の犠牲などを声高く提起するようなことは，政府の意向に従って，政治的に躊躇されるものになったことは，否定できない。

例えばチャンネル諸島の場合，ドイツ軍占領に基づく犠牲を示す事績等は，終戦後しばらくの間は特に注意が払われることもなく，不問のものとされていた。それが，戦争の犠牲を示すダークな事実として注目され，ダークツーリズムの地として認められるようになったのは，実に1990年代になってからである。

これは通常，“遅延されたダークツーリズム”（dark tourism delayed）といわれるものであるが（この点はTunbridge & Ashworth, 2017, pp. 17-19による），チャンネル諸島の場合のこうした遅延行為，すなわち1990年代まではナチス・ドイツ軍の残虐行為に対する糾弾行動等は差し止められ，取り上げられなかったのは，当時の社会的事情，というよりは，端的にはイギリス政府の意向に基づく政治事情によるものであった。これに加えてダンクレーは，さらに，そうしたことがいわば個人的事由によって起こる場合もありうることを指摘しているのである。

このことは，ダンクレーが「ダークツーリズムそのものは，大衆的良心の発揮（mass conscience）の一部をなすものであって，社会はそれを記憶し，それを踏まえて進むことが肝要である」と書き，続いて「ダークツーリズムのツーリストが経験するところのものが，社会にとって必要な形で（pro-social）作用するものかどうかは，ダークツーリズムに関する理論的に大きな問題（a key consideration）である」（Dunkley, 2017, p. 109）と提議しているところにはっきり現われている。

この点に関連しさらに注目されることは，ダンクレーがダークツーリズムサイトに対しても，そしてそのツーリストに対しても，いくつかの批判（criticism）がある場合があると指摘していることである（Dunkley, 2017, p. 110）。

ただしこの場合の批判は，第1に，こうしたダークツーリズムを売り物にしているツーリズム産業に対するもので，「過去の悲劇的事実がツーリズム産業によって商品化され（commodification），それによって異常なことに対して好奇心が強いツーリスト（morbidly curious tourist）を満足させるためのものになっている」（Dunkley, 2017, p. 110）場合などをいうが，現在のような資本主義社会では，こうした商品化は，通常のことになりがちであることは，認められなくてはならないであろう。

ちなみに，（旧西）ドイツ，ミュンヘン近くのダッハウ（Dachau）所在のナチス強制収容所跡では，別拙稿（大橋, 2022）で詳述しているように，第二次世界大戦終了後しばらくの後，いわゆる東西冷戦たけなわの頃，アメリカの西ドイツに対する立場の変化（反ドイツ的→親西ドイツ的＝東西冷戦の開始）に照応して，同収容所跡をいわば取り壊して廃止し，同敷地は地元住民に開放して，地元住民のためのものに転用するようにする主張が活発になされた。ところが，世界情勢が変わって（東西冷戦の終了），結果的に同収容所跡の存続が決まると，同収容所跡訪問のツーリストが，同市内商店やホテルなどを経済的に潤すよう働きかけることが盛んになされたものであった。

第2の批判点，というよりは問題点は，前述のような異常な好奇心を持つツーリストが，正

常な精神を持つ者と一緒になったような場合，両者の間で争いが起きることがあるかもしれないことである。ダンクレーが紹介している例によると，ハワイ・ホノルルのパールハーバー追悼施設で，ある時（太平洋戦争開始時点における日本軍の）奇襲攻撃を称賛するような落書きがあり，一般の，なかんずく英米などのツーリストを怒らせるような事件（angry graffiti）があったといわれる。ダンクレーは，少なくともそうしたものでは，「ダークツーリズムは人々を相互に敵（enemies）とさせるものになる」（Dunkley, 2017, p. 110）と論じている。

そこでダンクレーは，「ダークツーリズムについて，その存在は，将来，戦争や衝突が起きた場合，それに伴う悲劇が生まれないようにするものであるという主張があるが，しかしながら実際には，残念ながら悲劇的な事柄は地球上では絶えず起きている。もとよりその場合，原因となった事情は多様ではある」（Dunkley, 2017, p. 110）と述べている。

その上でさらに，こうしたダークツーリズムサイトがどれほど有用なものであるかどうかについては，表面的レベルを超えて，そのいわば本質をとらえることが必要である。しかし，そうしたことは，実際上かなり困難なことである。このことは例えば，少なくとも「こうしたサイトを訪れることが，そうした人々の日常生活においてどのような役割を果たすものになっているかについて，これまでのところ，ほとんど研究されたことがない」（Dunkley, 2017, p. 111）ところにはっきり現われていると宣している。

そこでダンクレーは，今日のダークツーリズムでは，少なくともそれが平和に向けた行動を少しでも強める方向で役立つことが望まれるとし，そのためには，例えば次の２点についてこれを促進するようにすることが必要としている。

第１に，世代間的（intergenerational）および異文化間的（intercultural）な相互理解の一層の増進に役立つ動きの助成に努めること。すなわち物事の民主主義的決定過程への参加を促進するところの同感性と動機づけ（motivation）を強化することである。

第２に，これまでのところでは，ダークツーリズムサイト訪問により生まれるインパクトが，ツーリストにおいて認識され意識される程度において不充分な場合があったから，それを是正すること。これは，例えば当該サイトの真に意味するところのものが，ツーリストの心の深部において批判的な行動精神を醸成させる点において不充分であったことに由来するから，この点を改めるよう，取り組みの方法や展示の仕方などを工夫することである。

いずれにしろ，ダンクレーによると，この問題では，何よりもまず，ダークツーリズムについて，それが真の社会的役割を果たすものになっているかどうかが本質的な（essential）事柄であるから，さしあたりそれを知ることが不可欠なことである。そこでダンクレーは，このことを知るために，ダークツーリズムツーリスト経験者について，（ダンクレーのいう）“心の深部をとらえる調査”を行った。その調査の概要は以下のようなものであった。

第１にこの調査は，適当な者として選定された４名のダークツーリズムツーリストについて個々に深くインタビューして深部の心情をとらえるもの（in-depth interview）で，そのためインタ

ビュー相手をごく少数に限定したものであった。それは，ダンクレーによると，“質問―回答”というよりは，はるかに“質問者と回答者との間の会話”（dialogue），ケーススタディというべきものであって，例えば，何が話されたかだけではなく，どのように話されたかをも強く斟酌するものであった。つまり，大量的なデータの収集ではなく，個別的な深部をとらえた質的分析に役立つものが必要というのであった。

第２にそれは，ヨーロッパの次の４種のダークツーリズムサイトの少なくとも１つを訪問したことのある者に限定したものであった。４種のサイトとは，戦争（warfare），ジェノサイド（genocide），悲痛的事件（grief），恐怖・戦慄（horror）である。

以下はダンクレーによる記述に依拠したものであるが，ここではそれを，回答者４名の者に代表される“ダークツーリズムツーリストの４つのタイプ”と表記する。

Ⅳ．ダークツーリズムツーリストの４つのタイプ

(1) タイプ１

ダンクレーが挙げている第１の例は，ダンクレーがマーティン（Martin）と表記している者の場合である（この項は Dunkley, 2017, p. 112 による）。マーティンは現職がイギリスの大学教員（university lecturer）であるが，国防義勇軍（Territorial Army）に在籍していたことがあるばかりか，父親を第二次世界大戦中に亡くしているという履歴のある者であった。

マーティンは，それまでにアウシュヴィッツ強制収容所跡を訪問したことがあるだけではなく，アメリカの南北戦争やこれまでの世界大戦の戦死者墓地などを訪れたこともある者で，ダンクレーの表現によると，“ダークツーリズム遍歴的なツーリスト”（serial dark tourist）で，「ダークツーリズムサイト訪問がツーリズムの主たる動機となっており，かつツーリズム先での主たる活動となっている稀な（rarely）存在」と特徴づけられる者であった。

ところが，マーティンのこのダークツーリズム志向性は，マーティン自身が述べているところによると，少なくともマーティンの近辺の人などに告げたりすることに“ためらいを感じること”（feel embarrassed saying it）があるというものであった。つまり，そうしたことは，人には大きな声で言えないような事情があるもの（there's almost some sort of voyeuristic embarrassment）のように受け止められるものになっていた。しかし他方において，ダンクレーは「マーティンは，こうしたアウシュヴィッツ強制収容所跡を含むダークツーリズムサイトの訪問について，例えば“言い訳をする”（excuse）ようなことはなかった。また，こうしたツーリズムがマーティンの日常生活にどのような影響を与えているかについても，マーティンは，自分でそれは良く判かっていると語るだけのものであった」と述べている。ダンクレーによると，西欧社会にはこうしたタイプが，少なくとも１つのパターンとしてあることを示したものであった。

マーティンの場合は以上とするが，しかしダークツーリズムツーリストの心情は，いうまで

もなく，すべてがこのようなものではない。次に，ダンクレーが第２の例として挙げているものを管見する。

(2) タイプ２

第２の例は，ダンクレーがエルヴィン（Elwin）と表記している者の場合である（この項は Dunkley, 2017, pp. 112-113 による）。エルヴィンはアウシュヴィッツ強制収容所跡を訪問したことがある者であるが，ダンクレーに語ったところによると，それはたまたま近くのクラクフに滞在することがあり，その時にアウシュヴィッツ強制収容所跡を訪れたものであった。

故にダンクレーによると，エルヴィンの場合，少なくともその訪問について，「確かに訪問以前，訪問中，訪問以降を通じてみて，エルヴィンが（同強制収容所におけるホロコースト行為に対する）深い内省（the deep reflexivity）から訪問を行ったとみることは難しいものであった」。従ってエルヴィンのこの訪問行為については，（エルヴィン自身の発言などの）「表面的なものを掘り下げて，真の理由（the underlying reasons）をはっきりさせることが必要であった」とし，それは次のようなものであったとしている。

すなわちダンクレーによると，「エルヴィンは，確かにホロコースト行為に対する深い内省からアウシュヴィッツ強制収容所跡を訪問したものではない。しかし，同強制収容所跡がホロコーストの所であったことは，明らかにこれを充分知った上で訪問したもので，その惨状を熱心に語っていた」ものであった。

それ故エルヴィンの場合には（前記のマーティンの場合とは異なって）こうしたホロコーストサイト・ツーリズム，すなわちダークツーリズムサイト訪問について，これは是非観ておかなくてはならないということもなしに，訪れたものである。ただし，それについて質問などをされれば，答えることに躊躇するようなことはない者であったが，しかし，そうした悲惨な行為が二度とないよう，何か行動をしなくてはならないという意識を，持つ者でもなかった。

つまりエルヴィンは，要するに，そこで犠牲になった人々に対する彼なりの（単なる関心である）共感性（empathic）をもって訪れたものであった。そしてこうした記憶と共感性をもってホロコーストサイトを訪れることは，多くの人の場合にみられることであると，ダンクレーは付け加え，その上で，エルヴィンの場合は，いわば一般の通常の人々の場合を代表しているパターンであるが，それは他面では，こうした惨禍が二度と起きないように特別に何か行動をする必要があることまでには至らないものである，と締めくくっている。

(3) タイプ３

ダンクレーの論考で，第３の例になっているのは，ダンクレーがスー（Sue）と表記しているところの，57 歳のアメリカ女性で，ロンドンのホラーツアー（horror tour）参加者の場合である（この項は Dunkley, 2017, pp. 113-114 による）。ただしこのケースでは，ダンクレーの論述は，その紹介程度に

終わっている。つまり，スー自身が特段に何も語らなかったのである。ダークツーリズムに関するインタビューで実質的に何も語らないというものも，こうしたツーリストにみられる１つのパターンといえば，パターンである。本稿ではそう解して本項は終わり，第４の例に移行する。

(4) タイプ４

ダンクレーの論考で，第４の例になっているのは，ダンクレーがデーヴィッド（David）と表記している者の場合で，デーヴィッドはイギリスのヴィカー（vicar：教区牧師）の地位にある者であり，バーミンガムでチャプレン（chaplain：従軍牧師）を務めていた者で，なかんずく第一次世界大戦関連ダークツーリズムの常連的参加者であった（この項は Dunkley, 2017, p. 115 による）。

そのツーリズムは，主として徒歩で旧戦場であった所をめぐるものであった。デーヴィッド本人が強く語っていたところによると，こうしたダークツーリズムで最も問題となること，つまり最も気になることは，こうした行為は，本来，巡礼（pilgrimage）に似たもので，名誉ある尊敬すべきものであるのか，それとも，単なる覗き見的なもの（voyeuristic）かということであった。

すなわち，デーヴィッドは，ツーリストとしては，旧戦場ツーリズム（battlefield tourism）を行うことに強い動機を持つ者であるが，そうしたツーリズムは現在の社会事情のもとでどのような意味を持つものかについて悩んでいるのであった。つまり，それは“単なる覗き見的なもの”，つまり窃視行為ではないかという悩みであった。

こうした悩みは，ダンクレーのみるところ，多分に，この種の旧戦場ツーリズム愛好者にありうるものであった。宗教職にあるデーヴィッドはそれを代表するか，その程度が高いと位置づけられるものであった。このような意味で，デーヴィッドの場合は，現在における旧戦場ツーリズムを中心にしたダークツーリズムツーリストの１つのパターンという意味を持つものであった。

(5) 小括

以上の上にたってダンクレーは，ダークツーリズムツーリストの心情について，「こうした死のサイトを訪れた者でも，そこを立ち去った後では，結局，（これらは過去のものだという）安堵の念（the sense of relief）を持つものであって，それは恐らく『ツーリズムを通して平和を』というスローガンのもとに努力するというようなことには，とてもならないものであろう」とする一方，では，「ダークツーリズムサイトが社会貢献的なもの（pro-social）になるのには，果たしてどのようなことが必要であろうか」と提起している（この項は Dunkley, 2017, p. 115ff. による）。

この点についてダンクレーは，理論的には，既述のように，単なる共感性が同感性に高まることが課題であるとするとともに，総括的には，重ねて「ダークツーリズムサイトを訪れた結果，同感性を持つことになり，それが，『ツーリズムを通して平和を』のために何か形のある動き（a tangible contribution）をするきっかけになるであろうことが肝要」と述べ，その上にたってそのためには，例えば（オランダ，アムステルダムにある）“アンネ・フランク・ハウス”のビジターセ

ンターで行われているような対話ゲーム（interactive game）が有用であると推奨している。つまり，共感性が同感性に高まるには，なんらかの先導的役割を果たすものが必要というのである。

ちなみに，上記のダークツーリズムツーリストとのインタビューのうち，デーヴィッドの場合において，こうした死者の跡を訪ねるダークツーリズムは，“覗き見的なもの（voyeuristic）”ではないかということが大きな悩みの１つになっているが，これは，実は，2007 年，シャーラー（Dominik Schaller）により提起された命題である。シャーラーは，いわゆるダークツーリズムサイトといわれるものも，今や 21 世紀では，“単にツーリストの覗き見的な（voyeuristic）要望に応えるだけのものに貶質した（degenerated）”（Schaller, 2007, p. 515, cited in, Sharpley & Friedrich, 2017, p. 135）と提議している。

ただし，これを引用，紹介しているシャープレー／フリードリヒ（Sharpley & Friedrich, 2017）は，この上において，このようなシャーラーの主張は誤りであるから，是正する必要がある。しかしこうした誤った主張が起きるのは，何よりも，そもそも“ダークツーリズム”，なかんずく“ダークツーリスト”という用語が誤っていることに起因するものであるから，「“ダークツーリズム”，とりわけ“ダークツーリスト”という用語は，ますます疑問のあるもの（increasingly questioned）になっていることが全く明らかである」とし，さしあたりこれらの名称を無くすことが必要とし，同論考の結語において「今や“dark”という言葉と“tourist”という言葉とを断ち切るべき時である」（Sharpley & Friedrich, 2017, pp. 135, 145）と力説している。

本稿筆者としては，このことは，いうまでもなく，単なる用語上の問題ではないと思料するが，用語を変えることによって事の成り行きが変わることがありうることは，これを認めるものである。

さらに本稿筆者としては，このようなシャープレー／フリードリヒの“ダークツーリズムという用語の否定論”が実際にはどのようなものかを，この脈絡において考察しておくことが必須なものと思料する。というのは，ダークツーリズムという言葉は，何故否定されるべきものかを承知しておくことは，本稿論題上不可欠であるからである。

シャープレー／フリードリヒの論考は「ルワンダにおけるジェノサイドツーリズム―ダークツーリズム概念の否定論」（Sharpley & Friedrich, 2017）というもので，直接的には，アフリカ，ルワンダで 1994 年に起きた同国内部族間の衝突において一方の部族の者が他の部族の者により大量的に殺害された事件の追悼施設，例えば 2004 年にオープンした“キガリ・ジェノサイド追悼施設”（the Kigali Genocide Memorial：KGM）を中心にしたツーリズムの模様を取り上げたものである。結論を先にしていえば，少なくともこうしたものの場合，ダークツーリズムという用語は全く不適切で，こうしたツーリズムに使用することは，絶対に止めるべきであることを力説しているものである。

V. ダークツーリズムという名称の否定論

(1) 主張点

このシャープレー／フリードリヒの所論で土台になっている考え方は，例えば前記のダンクレーのそれと対比してみると，ダンクレーの所論では，ダークツーリズムツーリストたちは，そのダークツーリズム行為において例えば「ツーリズムを通して平和を」というスローガンの見地から何か行動を起こすようなインパクトを必ずしも得るものではない，という観点にたつが，これに対しシャープレー／フリードリヒのジェノサイドツーリズム論は，ルワンダの大量虐殺追悼施設，端的にはKGM訪問を中心にしたツーリズムでは，そうしたことは全面的に妥当するものではないのであって，少なくともこうしたジェノサイドツーリズムでは，ツーリストたちはそのツーリズムにより強いインパクトを得るものである，というものである。

すなわちシャープレー／フリードリヒは，「こうしたジェノサイドサイトは，当該惨事の原因と（出来事の）恐ろしさ（horror）を人々に強烈に告げ，教えるものであることによって，そうしたことが二度と起きないようにすることが人類に課せられている課題であることを，ツーリストたちに教えるものになっている」のであり，「ルワンダにおけるジェノサイド追悼施設，なかんずくKGMを訪れた人々では，それが（シャーラーのいうような）“覗き見的なもの”などでは全くないことは明らかである」（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 145）と力説している。

この場合，シャープレー／フリードリヒの問題意識になっているものは，基本的には，次の2点である。第1点は，ダークツーリズムのような死者や惨事の跡などを訪ねるツーリズムは，かなり以前からあったものであるにもかかわらず，近年において改めてダークツーリズムという名称で提示されるようになったのは，何故かを明らかにすることである。第2点は，関連して，では，ダークツーリズムとはそもそもどのようなものかを鮮明にすることである。

まず第1点について，シャープレー／フリードリヒは「ダークツーリズムとして行われている事柄は，ダークツーリズムとしてツーリズムの1特定分野として提示されるよりも，はるかに古くから存在してきたものであり，このことは広く認められていることである。すなわち，人々の旅行（travel）というものが始まって以来，人々は死（death），災害（disaster），災難（suffering）になんらかの形で関連づけられる場所やそうした出来事のあった所に，意識的に，あるいは他の形で，引き付けられてきたものである」（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 136）と提議している。

ところが近年になって，ダークツーリズムといわれるものがとみに盛んになっているが，それは要するに，ポピュラーなツーリズム欲求を充たすために，死（者）を商品化しているもの（the commodification of death）であって，それがツーリズム供給の主要な流れ（mainstream of tourism providers）になっているものであると提起している（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 136）。つまり，現在ダークツーリズムとよばれているものは，本質的には，ツーリズム商業化の進展に照応して死や惨事の場面が商品化されたものである，というのである。

これが第２点で，再言すれば，ダークツーリズムとよばれるものは，要するに，人の死やその場所を商品化しているものである。ただしその場合，そもそもダークツーリズムとは何かという問題を解明するについては，相対的に限界がある。というのは，それは，理論化の進んでいない状態（relatively limited and poorly conceptualized）にあるものであって，現在のところでは，「（理論的に）確立したとは，とても言えないもの（uncertain and contentious）である」からである，というのである（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 136）。

ただし，シャープレー／フリードリヒとしては，「例えばジェノサイド跡やメモリアル的なものをツーリスト誘因物として集めて，利用し，商品化を進めることは，もともと倫理的な視点，なかんずくツーリズム・モチベーションの本来の観点からみて，強い疑問があるもの」である。それ故，例えば前記で紹介したシャーラーのように，それを“覗き見的なもの”というものがあってもおかしくはない。しかしシャープレー／フリードリヒとしては，それは事態を“不当に貶置したもの”（pejorative）といわざるを得ない，というのである（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 135）。

もとよりこの場合，シャープレー／フリードリヒが主張せんとしていることは，いうまでもなく，死者を訪れるツーリズムをダークツーリズムと称して商品化することは止めるべきであるということであって，死者を訪れること自体を否定しているのでは毛頭ない。シャープレー／フリードリヒは「ダークツーリズム研究が正当なものとして，（人々の主観により異なるというものではなくて）客観的に認められるものになるために絶対に無くすべきものは，“ダーク”という言葉である」と主張し，そもそもダークツーリズムという言葉は，ジャーナリズム志向のもので，アカデミック関係からは疑問符が付けられてきたものである，と宣している（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 137）。

以上の上にたってシャープレー／フリードリヒは，結論的に次の２点を主張するものとしている。第１に，「ダークツーリズムサイトは，本来，単なるツーリズムサイトやツーリズム誘因物（attraction）の１つとして考えられたり，ツーリズム消費地の１つと理解されたりしてはならないということである。すなわちダークツーリズムといわれるものは，本来，当該ツーリストと当該ツーリズムサイトとの間において（単に見るだけというものではない）強いコンテクスト（context）があるものと解されるべきものである」。つまりそれは，当該ツーリストにとっては，あくまでも，当該サイトが指し示す死者や惨事被害者との一体性を醸成するコンテクストたるものである，というのである。

第２にこの場合，なかんずく当該ツーリストに対し“ダーク”という形容詞を付けて，“ダークツーリズムツーリスト”とよぶことは，絶対に止めるべきである。この言葉は，当該サイトを訪れるツーリストたちの実に多様な理由や動機を正しく伝えないものであるばかりか，少なくともシャープレー／フリードリヒの行ったルワンダの 1994 年の部族間抗争の犠牲者追悼施設訪問者についてのアンケート調査によると，そうした訪問者たちには覗き見的雰囲気などは全然なく，全く畏敬（trepidation）とポジティブ的精神に基づくものであることがはっきりしている

からである，と力説している（Sharpley & Friedrich, 2017, pp. 144-145）。そこで次に，この調査の概要をみておく必要がある（以下は Sharpley & Friedrich, 2017, pp. 142-145 による）。

(2) アンケート調査結果

このシャープレー／フリードリヒによるアンケート調査は，2013 年と 2014 年の 2 回にわたり，KGM を訪れた国際ツーリスト（international visitors），すなわちルワンダ以外からの来訪者について行われたもので，ともに例えば KGM 来訪の理由や経緯，同訪問について事後感想，部族間抗争にともなう大量虐殺行為についての理解の程度や感想（knowledges, understandings, reflections）などが尋ねられたものであった。

この調査により，まずはっきりしたことに，次のようなことがあった。すなわち，この調査に答えた人の中には，例えばルワンダにはもともと他の目的で来たもので，KGM 見学が主たる入国目的ではなかったが，ルワンダに来たので，いわばついでに KGM 見学に来たという人が，結構多くみられたことである。しかし注目されるべきことは，こうした人を含め，KGM 来訪者の多くの（少なくとも第 2 回調査ではすべての）回答者が，KGM のことを今後知り合いや関係者に伝えたいと回答していることであった。

こうした点にたってシャープレー／フリードリヒは，「今や，1994 年ジェノサイドとその主たる追悼施設のことなどが，単にルワンダ来訪の 1 主要要因になっているだけではなく，（いくつかあるところの）ジェノサイド追悼施設の少なくとも 1 つを訪問することが，今日におけるルワンダ訪問の基本（fundamental）もしくは不可欠なこと（essential）になっている」（Sharpley & Friedrich, 2017, pp. 142-143）としている。

さらに KGM を中心にしたジェノサイドツーリズムにおいて，参加ツーリストたちはどのような影響を受けるものであるかについてみると，シャープレー／フリードリヒの記述には，第 1 回調査と第 2 回調査では表現にやや違いがみられる。第 1 回調査では「すべての回答者において KGM などの見学は，現在のルワンダ理解の助けになるものとなっており」，こうした追悼施設訪問に対して積極的参加の意思がある，というものとなっていたが，第 2 回調査では，それがさらに前向きで，「それは，確かにこの世界における希望の大きな教訓（a great lesson of hope for this world）となる」というものであるばかりか，こうしたことは地球上で二度と起こしてはならない，という趣旨のものになっている。

この上にたってシャープレー／フリードリヒは，「ルワンダ・ジェノサイドサイト訪問は，意図（intent）においても結果（outcome）においてもポジティブなもの」であって，「（ダークツーリズムといわれるものを）そのままダークツーリズムという名称のもとに，特殊なツーリズム市場として，もしくはツーリズム消費の 1 形態として続けることは，もはや到底できるものではない」ばかりか，こうした場所をダークツーリズムと称して，娯楽的な心づもりから訪れるようなこと，つまりシャーラーが“覗き見的なもの”とよんだようなものを排除するためにも，今や，ダー

クツーリズム，なかんずくダークツーリズムツーリストという言葉は，使用しないようにすべきであると力説し，締めくくりの言葉としている（Sharpley & Friedrich, 2017, p. 145）。

シャープレー／フリードリヒの所論は以上とする。ところで，ダークツーリズムについても，少なくとも今日では，各種メディアの報道などによってライブ性（liveness：実況性）が高いものになっており，それが当該ツーリストの心情を揺さぶり，そうした惨禍（ここでは端的には民族差別や戦争に関連した惨禍）が二度とないようにするなんらかの行動を起こさせるきっかけになるであろうことを強く主張しているものに，（本稿冒頭で一言した）クヌードセンの所論がある。

クヌードセンの論説は，ダンクレーやシャープレー／フリードリヒのそれとは異なり，例えばインタビューやアンケート調査などの実証的根拠に基づいたものではない。しかし本稿のテーマからは，なかんずくロシアによるウクライナ侵攻戦争のことを考えると，クヌードセンの所論を考察しておくことが必須である。ここで取り上げるクヌードセンの論考は「ダークヘリテイジのライブの経験」（Knudsen, 2017）というタイトルのもので，前記のダンクレー論考（Dunkley, 2017）やシャープレー／フリードリヒ論考（Sharpley & Friedrich, 2017）所収のフーパー／レノンの編著（Hooper & Lennon (eds.), 2017）に収録のものである。次にクヌードセンの論考を管見する。

Ⅵ. ダークツーリズムサイトのライブ性論

クヌードセン論考の出発点になっているのは，次のテーゼである（以下本節は Knudsen, 2017, p. 174ff. による）。すなわち，今日のダークツーリズムについては，いわゆる（単なる記号論的な表象レベルではない）“表象以上”（more-than representational：この点について詳しくは大橋, 2021 を見られたい）という理論的立場，かつ，感情的（emotional）立場，および，物事をライブレベル（liveness）でとらえる立場にたち，「過去の事柄（events：以下イベントともいう）を直接見たり体験したりしているような感じ（a feeling of being in the immediacy of events, even though they belong to the past）」（Knudsen, 2017, p. 175）を持ちうるものになっている，というものである。

こうしたことは，クヌードセンによれば，現代的な各種情報・通信技術とメディアの進展，つまり現代の最先端的メディア環境（media environments）を前提にすれば，当然のことであるが，その場合，まず，クヌードセンは，こうしたライブ性について，例えばアウスランダー（Auslander, P., 1999）に代表される，いわゆる“古典的な”（classic）なライブの考え方とは，区別されるべきものであることを主張する。

こうした古典的なものは，クヌードセンによれば，要するに，“パフォーマー”（performer：演技者）とオーディエンス（audience：観客）との物理的一体性（physical co-presence），換言すれば，（事柄・行為の）実行（production）と受容（reception）の一体性をいうものであった。しかしこれに対し，今日のライブ性は，あくまでもいわゆる実況性，つまり現場臨場性に重点があるものである。

それは，例えばこれまでにおいても「ライブ放送」とか「ライブ・レコード」と言われてき

たものであって，定義的には「メディア化されること（mediated）とライブ性（live）とが相互に依存し合っているような行為・経験において，両者がまさに共存している（co-exist）ことをいうものであり，故に現在のライブ性（liveness）の概念は，古典的なそれとは異なって，少なくとも次の２点で新しい意味を持つもの」（Knudsen, 2017, p. 175）と規定される。

第１に，例えばテレビ等で観たり聴いたりするところの，ライブ性という場合である。しかしそれは根本的には（理知的ではない）情動的（affective）なものになっている。第２に，その場合“ライブ”には，人間以外のもの（non-human agenda）が利用されており，旧来のような人間の視聴力の限界に留まるものではないことである。つまり，今やライブ性は，人間の能力を超えたもの，端的には機械的な電子的な力に依存したものになっている，ということである。

ただし注意されるべきことは，近年では，さらにライブ性には“証人性”（witness）という概念が必須的構成要素になっているという考え方が，例えばフロスト／ピンシェフスキイ（Frost, P. & Pinshevski, A.）らにより提起されていることである（Frost, P. & Pinshevski, A. (eds.), 2011, cited in Knudsen, 2017, p. 184）。

これらの上にたってクヌードセンは，こうした考え方によれば，ダークツーリズムツーリストたちは，確かに過去のイベントについて直接的な現場目撃者となるものではないが，しかしダークツーリズムサイトにたつことによって，モード（modes）とメディアも通して，あたかもその事柄のあった実際の現場に現に居るような感じ（臨場感）を持つものになるようになっている，少なくとも，そうした効果を生む力を持つものになっている，というのである（Knudsen, 2017, p. 176）。

その上においてクヌードセンは，結語において，以下のように述べ，終りの言葉としている。すなわち「ツーリストがダークツーリズムによって情動的に（affectively）受け止めるものは，一方における（同サイトを見学した結果起きる）身体的な安全性（bodily safeness）と，他方における共同体的な脆弱性（common vulnerability）であるが，とりわけ，これらのことに対する配慮が，歴史上でも，現状でも，不平等である（unequal distribution of these positions historically and in contemporary societies）という認識である。これは，（なかんずくダークツーリズムの）ライブの姿にみられるパラドックスである。しかし，こうしたパラドックスを体験することは，人々の行動の骨格をなすところの，“学習から情動に至る一連の動き”（a learning-to-be-affected endeavor）において，重要な事柄については動員をかけたり（mobilization），行動を行う（action）ということのための１つのステップになりうるものであろう」（Knudsen, 2017, p. 184）。

つまり，クヌードセンによれば，ダークツーリズムサイトの訪問は，今や強いライブ性があるものであって，そこを訪れた人々に対し，そうしたことが二度とないよう，なんらかの行動を起こさせる役割を果たすきっかけになりうるものである，というのである。

Ⅶ. おわりに

以上においてダンクレー，シャープレー／フリードリヒおよびクヌードセンの所説についてレビューしてきた。このうちで，ダンクレーの所説では，本稿冒頭で述べているように，ダークツーリズムは，現在の形態のものそれだけでは，「ツーリズムを通して平和を」という点においても不充分性があるという点に比較的重点がある。しかしその上でダンクレーは，（例えばオランダ・アムステルダムの“アンネ・フランク・ハウスのビジターセンター”で行われているような）人間の意識を変革するような方策が採られれば，単なる共感性を超えた同感性を育成することができる。その時には，ダークツーリズムによって「ツーリズムを通して平和を」は大きく前進することが可能になるであろうと述べ，終りの言葉としていることが大いに注目されるべきである。ダンクレーの真に言わんとするところは，いうまでもなく，ここにある。

この点では，本稿で取り上げた論者の中でも，クヌードセンが，今日のようなメディア化された社会では，ダークツーリズムには人々を行動に導くきっかけになるものがあるという見解を提起していることが改めて注目されるべきである。これが，今日の標準的な考え方とみられる。ちなみにクヌードセンは，その論拠の一例として，2001 年 9 月 11 日に起きた，ニューヨーク，世界貿易センタービル・テロ攻撃跡の場合を挙げ，そのライブ性に基づいてその後の反テロ運動は大きな進展をみせたものであることを指摘している（Knudsen, 2017, p. 175）。今日では，既述のように，何よりもロシアのウクライナ侵攻戦争が取り上げられるものである。

この点は，本稿筆者としては，本稿の重要論点と考えるが故に，さらに他の論者ではどのような見解が提示されているかを参照するために，旧拙稿で提示したものではあるが（大橋, 2022），例えばオランダのアシュワース（Gregory J. Ashworth）とカナダのタンブリッジ（John E. Tunbridge）が，共著論考（Ashworth & Tunbridge, 2017）で，直接的にはナチス KZ 跡ツーリズムについて，次のように述べているところを，ここでも重ねて引用しておきたい。

すなわちアシュワース／タンブリッジは，「ツーリストたちがこうしたダークツーリズムサイトを訪れる動機は，様々である。個人的な強い信念（conviction）に基づくものもあれば，規格的なツアーの一環というものもある。絶対に観ておかなくてはならない所という人もあるし，単に歴史的遺跡として見学するだけという漠然たる希望を持って来る人もある。また，学校行事等で集団的に訪れるだけという場合もあるであろう。しかし，そのいずれにしろ，こうしたサイトのツーリストは，そのサイトで眠っている犠牲者のことを強く思い，悲しみや悲痛の念，あるいは怒りの心を持って，人間のなしたことに対して，自ら有罪の念を抱いたりして恥じたり，自責の念を持ったりすることになる。少なくとも，そうした残虐行為が何故行われたかに関心を持つようになる」（Ashworth & Tunbridge, 2017, p. 80）と書いている。

続いて本稿筆者は，同論考において次のように述べている。これが，この点に関する本稿筆者の考え方である。すなわち，ナチス KZ 跡ツーリズム等のダークツーリズムについていえば，

こうしたツーリズムへの参加により，たとえ最初は好奇心を持つだけであっても，そうした残虐的非人間的な行為が二度と行われないことを望む精神が，それぞれの形で醸成されることが肝要と考える。これが，“歴史から学ぶ”ことの真の意味と考えられるが，そうしたこともダークツーリズムの普及の考えによって強化されるものと思料される（大橋, 2022）。

ここでは，これらの上にたって本稿筆者としては，理論的に明確にしておきたい点を含めて，さらに次の５点について述べ，終りの言葉としておきたい。

第１点は，本稿で既述のように，ダークツーリズムも，今日の社会では，資本主義的矛盾という存在性からまぬがれることができない，という点である。この点は，なかんずくシャープレー／フリードリヒの所論に強くみられるものであるが，こうした資本主義社会下におけるツーリズムの商品化，ツーリズム事業の資本主義的商業化ははっきり認識しておくべきものと思料する。ここでは，この点に関連し，本書で取り上げた３論考所収の編書（Hooper & Lennon (eds.), 2017）においてその編者の一人，イギリス・グラスゴー，カレドニアン大学のフーパー（Glenn Hooper）が同編書序文（Hooper, 2017）において，今日社会におけるダークツーリズムの問題点について総括的に次のように述べているところを引用，紹介しておきたい。

すなわちフーパーは，こうした問題点として次の３点があるとしている。第１に，残虐行為（atrocity）というものは，それをどのようにとらえ（definition），展示するかについて，実際には，難しい問題がある。というのは，そうした行為には，（後日それを実際にあったところの）真に迫る姿で展示することが実に困難な場合が多いためである。

しかもこの場合特段に注意されるべきことは，第２に，ここでは人々の記憶が頼りであるが，その中には記憶を続けるうちに，当該出来事を“名誉なこと”（glorification）ととらえようとする性向（potential）を持つ者があることである。

故に要するに，第３に，こうした残虐行為の史跡（heritage）の管理とマーケティング（the management and marketing）は，非調和的史跡に特有な根本的な矛盾（the cardinal dilemma of dissonant heritage）があるものになることである。従ってこうした事情を考慮すると，「ダークツーリズムサイトにかかわる問題はすべて，いつまでも“答えのない問題”として存続するものである（remain unsolved）」（Hooper, 2017, p. 10：“非調和的史跡”について詳しくは大橋 , 2022 を見られたい）と結論づけている。

第２点は，ただしこの場合，本稿筆者として強調しておきたいことは，ここでいうダークツーリズムサイトの訪問により，当該ツーリストでは，はっきり口頭で表明するものかどうかの違いがあるにしろ，なんらかの（単に見るだけではない）精神的感情的影響を受けるはずのものであるということである。この点では，シャープレー／フリードリヒの所論およびクヌードセンの所説が参照されるべきと考えるが，こうした影響は，理論上では，本稿でもなかんずくクヌードセン論考で言及されているように，“affect”（情動行為）といわれるものに根拠がある。すなわちこの場合それは，一般的には次のような理論的解釈のものであることをいう。

すなわち，“affect”とは何かについて，イギリスの著名な「ナイト」の爵位をもつ論者，ス

リフト（Sir Nigel Thrift）は，それを「人間の行動のための思考の１つの形式」（a form of thinking）と定義し，それには「楽しい思いを起こすもの」（euphoric affect）と，「そうではない（例えば“深刻な”，“悲痛な”）思いを起こすもの」（dysphoric affect）との２種があると規定している（Thrift, 2008, pp. 175, 208）。このスリフトの規定によれば，ダークツーリズムサイトの訪問は，affect の中でも後者，すなわち dysphoric affect に位置づけられるものと思料される。

第３点は，例えばダンクレーやシャープレー／フリードリヒの所論には，現実にある事実をそのまま伝える現実論と，そのあるべき姿を提示する規範論的主張とが共存しているところがあるという点である。これは，理論的には，商品化を中心にした資本主義的矛盾という存在性の１つの反映形態ではあるが，本稿筆者としては，こうした事物の資本主義的矛盾という存在性に基づいて考えても，例えば拙稿（大橋, 2022）で述べているように，少なくとも現代の社会科学では，なんらかのあるべき姿，行くべき道を示すものでなければ，すなわち単なる現実・事実の描写に留まるようなものでは，意味がないと考える。故にダンクレーの所論についても，とりわけシャープレー／フリードリヒの所説については，規範論的主張に力点を置いて解されるべきものと考える。

第４点は，「ダークツーリズム」，端的には「ダーク」という名称に関わる問題である。この点に関しては，まず，ホロコースト，ジェノサイドや戦争の事跡等をこうした言葉でよぶのは，本稿筆者としても不適切と考える。例えばこれらは「ホロコーストツーリズム」，「ジェノサイドツーリズム」，「戦史跡ツーリズム」，「災害地跡ツーリズム」と言えばいいものである。しかし他方において，公的統計等では「ダークツーリズム」として総称されるのはやむを得ないのではないかと考える。要はジャーナリズムなどで「ダークツーリズム」が多用されないことである。ちなみに，帰省旅行等は一般に「観光」とは言われないが，世界の，かつ日本の公的統計では帰省旅行等も「観光」（英語では visitor）の定義に入るものになっており（詳しくは大橋, 2020），用語上の乖離は，すでにこの点にある。

第５点は，本稿冒頭でお断りしているように，本稿で論じたものは，すべてがロシアのウクライナ侵攻戦争以前のものであることである。現在の所論としては，この戦争のことを斟酌して論じなくては意味がないと充分に心得ているものではあるが，それは別の機会とさせていただいている。このことを，最後に重ねてお断わりしておきたい。

参照文献

Ashworth, G. J. and Tunbridge, J. E. (2017), Death camp tourism: Interpretation and management, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 69–82.

Auslander, P. (1999), *Liveness performance in a mediatized culture*, London: Routledge.

Carr, G. (2017), A culturally constructed darkness: Dark legacies and dark heritage in the Channel

Islands, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 96–107.

Dunkley, R. (2017), A light in dark places? Analysing the impact of dark tourism experiences on everyday life, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 108–120.

Frost, P. and Pinchevski, A. (eds.) (2011), *Media witnessing: Testimony in the age of mass communication*, London: Palgrave.

Hooper, G. (2017), Introduction, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 1–11.

Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.) (2017), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge.

Knudsen, B. T. (2017), Experiencing dark heritage live, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 174–186.

Schaller, D. (2007), From the editors: Genocide tourism: Educational value or voyeurism? *Journal of genocide research*, vol.9, p. 515.

Sharpley, R. and Friedrich, M. (2017), Genocide tourism in Rwanda: Contesting the concept of the dark tourist, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 134–146.

Thrift, N. (2008), *Non-representational theory: Space, politics, affect*, London: Routledge.

Tunbridge, J. E. and Ashworth, G. J. (2017), Is all tourism dark? in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark tourism: Practice and interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 12–25.

大橋昭一（2012）「批判的観光学の形成―観光学の新しい一動向―」『関西大学・商学論集』57 巻 1 号，61–84 頁

――――（2017）「ヨーロッパのカタコンベなど―死者の扱われ方：東は東，西は西―」『和歌山大学・観光学』16 号，（観光フォーラム）79–82 頁

――――（2020）「ツーリズムの定義・概念・理論類型―ツーリズム理論研究の出発点の諸問題―」『和歌山大学・観光学』23 号，（観光フォーラム）31–37 頁

――――（2021）「スリフトの非表象理論（NRT）の研究―現代社会をどうとらえるか：原理論の提起―」『和歌山大学・経済理論』406/407 合併号，17–36 頁

――――（2022）「ダークツーリズムについての近年の諸論調―ナチス強制収容所跡ツーリズムなどを例証に―」『和歌山大学・観光学』26 号，17–29 頁

Prologue to the Slogan “Peace through Tourism”: How Dark Tourism Can Help Its Progress

Shoichi Ohashi

Abstract

This paper addresses the question of what the slogan “peace through tourism” can mean in the context of “dark tourism.” In particular, it discusses in depth the relationship between the two amidst dark tourism’s growing commercialization and popularity. Validating the above slogan (“peace through tourism”) is currently a pressing issue and incidentally, tourism to the sites of the Rwandan genocide is said to be valid in both its intent and outcome.